**〔解　　説〕**天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。司馬芝叟の長話（小説）を元に、山田案山子が創作、後に萃松園が添補潤色。全五段の時代物です。各地の名所を織り込み、運命に翻弄される男女と、お家騒動などの伏線を張った筋立ては変化に富み、箏歌を取り入れて音楽的にも特徴ある作品になっています。

**〔ここまでのあらすじ〕**宮城阿曽次郎は京で芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪と恋に落ちますが、鎌倉出張の命を受け、別れ際に朝顔の歌を扇に書いて深雪に渡します。急に本国へ引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然にも阿曽次郎と再会しますが、それも束の間、再び離ればなれとなってしまいます。国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡され、駒沢が実は宮城阿曽次郎であることを知らない深雪は、阿曽次郎恋しさに家出してしまいます。放浪の末、辛苦から深雪は盲目となり、三味線とともに唄を歌って日々をしのいでいました。深雪を捜す乳母浅香と出会うものの、浅香は悪漢のため命を落としてしまいます。

**〔あらすじ〕**一方、駒沢次郎左衛門は、国元に戻る途中、同僚岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。岩代は悪人の一味で、駒沢を亡き者にしようと萩野祐仙に命じてしびれ薬をもろうとしますが、宿屋の亭主徳右衛門が発見、笑い薬と取りかえられて事なきを得ます。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

**笑い薬の段**

こそは入りにける。後に祐仙一人笑み

「味いぞ〳〵。当座の褒美がまず十両。さらばこれから薬のしかけ」

といひつゝあたり見廻して、件の薬を湯の中へそっとほりこみ、蓋ぴっしゃり

「かうして置いて駒沢が戻り次第にふり立てゝ、われらが先へ服加減、解薬の力でしゝらしん。駒沢めは忽ちにぐにゃ〳〵〳〵と薬の効能。こいつはよっ程えい〳〵うまいわ〳〵〳〵」

と悦び勇むそのところへ、奥よりいきせき下女お鍋

「申し〳〵奥のお客がお待ちかね。早う〳〵」

とせり立つる。声にびっくり祐仙は、そしらぬ顔で

「エヘン」

奥に入る。始終窺ふ徳右衛門一間を出でて後打眺め

「最前から聞いてゐれば、なにやら怪しいあの薬。駒沢様へ申し上げようか。イヤ〳〵、それでは却って当り障り。どうぞよい思案がありさうなものぢゃが。ヲヽソレ〳〵きのふ浜松で買うて置いた笑ひ薬。この湯をかへて、ヲヽさうじゃ〳〵。かうして置いてまさかの時は、オットよし〳〵」

と心でうなづき徳右衛門、勝手へこそは入りにけり。はや夕暮の忙しく、膳部の運ぶ寝道具を間毎〳〵に燈す灯の、きらを飾りて立帰る。駒沢二郎左衛門春雄、旅中ながらも武士の行儀くづさぬ羽織野袴、家来引連れ打ち通る。待ちまうけたる岩代多喜太、一間のうちより歩み出で

「これは〳〵駒沢氏。ことのほかお早いお帰り。シテ要用は相済みましたか」

「なるほど、殿様御帰国先触れの手筈、庄屋代官に申し付け、思はぬ延引さぞお待兼ね」

「なんの〳〵。旅草臥のおいとひなく、宿々のかけひき、イヤモ御苦労に存じまする。エヽ拙者もなにがなと存ずるところへ、国元にての医者、萩の祐仙と申す者。当宿に泊り合はせ、先刻はからず対面いたせしに、此奴ことのほか茶好きにて、道中にても茶箱を持参し、相楽しみをるとのこと。貴殿にもお好きの道、なんと一服飲んでおやりなされまいか」

「ハヽアそれは風流なる心がけ。しかしわれも人も旅草臥、所望いたすもなんとやら」

「ハテサテ、いらぬ御遠慮。薄茶一服所望いたせばとて、彼も好きの道でござれば、なんの草臥をいとひませう。ひらに〳〵一服おつきあひ下されい」

とおのがたくみの押付けわざ無理にすゝむるそのところへ、一間を出づる萩の祐仙、茶箱携へ心に笑み、悟られまじと空とぼけ

「これは〳〵岩代様」

「ヲヽ祐仙老。先刻は久々に積る話し」

「シテあなた様は」

「ヲヽこれなるは、その節お噂申した駒沢氏。文学武芸はいふに及ばず、なに一つ抜目はなけれど、イヤモ生得御遠慮深いお人。されども元来の茶の道には御執心。ヤ幸ひこれに白湯もたぎりある、先刻話のナ、ソレ薄茶一服所望だ〳〵」

「ヘヽ、これは〳〵、なか〳〵あなた方へ上げますやうな茶ではござりませねど、御所望とは身の面目。苦しからずば何服なりと、召上られ下されう」

と追従たらだら立上り、茶箱取出し毒薬の、たくみの裏流かゝれしとも、知らぬ手前のしかつべらしく、振立てゝ差し出せば、岩代多喜太詞を正し

「イザ駒沢氏」

と取次ぐところへ

「ヤまづ〳〵〳〵暫く」

と徳右衛門

「恐れながら」

と座敷に出で

「憚りながら旦那様。いかゞわしい申しごとながら、譜代お出入りの殿様の、御家来たるあなた方。私方で煮焚きの物はこの度に限らず、吟味に吟味をいたした上差上げませねば、千に一つ粗相がござりましては、この徳右衛門めが落度。泊り合はせしあなたのお茶、サヽヽヽ御如才のあらうやはなけれど、めったには、ナ、申し」

と、目顔で知らせば、岩代多喜太

「ヤアいらざるうぬがかばひ立て。身が昵懇の萩の祐仙。毒薬でも仕込みあろうかと、疑うての申し条か」

「アヽイヤ〳〵全くさやうでは」

「ムヽしからばなにゆゑ差止めた。駒沢殿の手前といひ、今一言いって見よ。真二つに打放す」

ときっぱ廻せば、祐仙押止め

「ア、イヤまづ〳〵〳〵〳〵〳〵お待ちなされ。貴公様の御立腹は御尤もなれども、徳右衛門の申すところもまた一理あり。ヤナニかういたさう。下拙めが毒見仕り、駒沢様へ差上げませう。なんと徳右衛門、それでいひ分はあるまいな」

「イヤモウ御自分にお毒見なさるゝ程、たしかなことはござりませぬ」

「ヲヽさうあらう〳〵。その代り、なにごともない時は、その分では済まさぬが合点か」

「イヤモ、それは是非に及びませぬ。御存分になりませう」

「ムヽヽヽヽ面白い〳〵。きっと詞をつがうたぞ。ドレ毒見を」

と茶碗取上げ、そっと解薬を先へ飲み、さあらぬ体にて件の薄茶、雫も残さず飲み終り

「徳右衛門、チョトそれへ〳〵、エゝ早く出ませい。見たか徳右衛門。サ、コヽヽヽこのとほりぢゃ。これでも別状があるか。徳右衛門、サどうだ」

「ハイ、ヤモ私めが粗相。まっ平御免下さりませう」

「ヤ、なんだ、御免下されい。御免下されいも気が強いわい。ヤイ徳右衛門、戎屋徳右衛門。ヤ戎徳め。サ、サ約束ぢゃ。それへ直れ。手討にいたす。それへ直れ、〳〵。ムヽヽヽアハヽヽヽ。アヽヽヽおかしくないそれへ直れ〳〵。プハヽヽヽ。アイヤおかしくない〳〵〳〵。オホヽヽヽなんぢゃ知らぬが滅多むしゃうにおかしくなって来た。アハヽヽヽヽヽ」

「コリャ〳〵祐仙。笑うてばかりゐずと、早く駒沢殿へ差上げてよからう」

「ハイ〳〵〳〵、イヒヽヽヽヽアハヽヽヽ。なるほど〳〵ただ今〳〵差上げます。アハヽヽヽ暫く〳〵お待ち下され、ヒヽヽヽヽホヽヽヽヽハレめんやうな。アハヽヽヽ笑ふまいと思ふ程、ホヽヽヽこりゃ〳〵たまらん〳〵〳〵。ヒハヽヽヽ」

「ヤイ〳〵〳〵、たわけ者。おかしくもないことをげら〳〵笑ひ。身どもは格別駒沢殿へ無礼であらうぞ」

「ヘイ〳〵〳〵アハヽヽヽヽ、イヤさやうにお腹は立てられな。ハヽヽヽ拙者も〳〵アハヽヽヽ笑ふまいと存ずれどホヽヽヽ、なにか〳〵腹の底から涌き出るやうに、アハヽヽ、アハヽヽヽアハヽヽヽアハヽヽヽ、イヤ〳〵とまりました。もう笑いません。笑わんぞ笑はん〳〵〳〵。笑はんといふたら、ドッコイ身も萩の祐仙。これでも医者でござる。憚りながら、寛怠ながら、恐れながら、ドッコイ笑わんぞ、笑はんといふたら笑わん〳〵〳〵〳〵、アヽくるしいアハヽヽヽアハ〳〵〳〵コリャ亭主〳〵、このあたりに医者はないか。医者は。医者が医者を頼むは、どうかかう卑怯なやうなれど、ホヽヽヽ、同商売は相互ひぢゃアハヽヽヽ。アヽ息がはずむ、これが〳〵笑ひ癪とでもいふものかい。イヒヽヽヽアハヽヽヽヽ、アゝたまらぬ〳〵、ハヽヽヽ臍が、裂けるわい、アハヽヽヽヽ」とすり替えた薬とは、いざ知らず、果ては茶箱も踏み散らし笑ひ入るこそ正体なき、姿にあきれ岩代多喜太、はかり戎屋徳右衛門、おかしさ隠すばかりなり。短気の岩代ぐっとせきあげ

「ヤアおほだはけの萩の祐仙。笑ひやまずウヌ手はみせぬ」

と力みかへれば、びっくりしながら、手を合しても止まらぬ笑ひ

「アヽめっさうな〳〵〳〵〳〵、ハアヽヽヽ、御、オホヽヽ〳〵、御了簡な、アハヽヽヽ」

と詑ぶる詞もあやちなく、笑ひ薬の利目とも、知らぬ祐仙息はずませ、転けつ笑ひつ

「ウフヽヽヽアハヽヽヽ」

逃げてゆく。案に相違の岩代はあきれ果てたる仏頂顔

「エヽ、さまざまの馬鹿者にかゝり、湯に入るを忘れていた。ヤイ亭主め。うぬよく邪魔をイヤサきり〳〵風呂場へ、案内ひろげ」

と、それとも得いはずむしゃくしゃ腹、席を蹴立てゝ廊下口。後に心を奥の間の、わが座敷へと、駒沢も座を立てこそ

**〔解　説〕**宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書いたものの、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

**〔ここまでのあらすじ〕**源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆき、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰ります。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行きます。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよっていました。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようとしますが、靡かぬのに腹を立てて、姫を刀で刺してしまいます。

**〈組討の段〉**一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせますが、熊谷が勝負を挑んで呼び止めます。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷きます。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけますが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼みます。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、敦盛を逃がそうとしますが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討ち落とします。そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶えます。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのでした。

**〈脇ケ浜宝引の段〉**石屋の弥陀六は、石塔の建立を依頼した若衆と共に石塔の前にやってきますが、若衆は急に姿を消します。通りすがりの百姓たちと弥陀六、娘の小雪が訝しがっているところに、敦盛の母・藤の方が源氏方に追われてやってきます。藤の方は、小雪が若衆に貰った笛を見て、敦盛のものではないかと問いただします。百姓たちは敦盛と熊谷の戦いの様子を語り、敦盛が討たれたことを知った藤の方は泣き伏します。先ほどの若衆は敦盛の幽霊であったのかと皆が話しているところに、追っ手が現れ、藤の方を渡せと迫ります。百姓たちが抵抗し藤の方を逃がしますが、思わず追っ手のひとりを殴り殺してしまいます。庄屋がやってきて死骸をあらため、傷がないことから誰も殺してはいないという説明をしに行く役を皆で押し付け合い、結局くじ引きで決めることにします。

**組討の段**

　去る程に、を始めて、一門皆々船に浮かめば乗り後れじと、に打寄れば、も兵船も、遙かにのび給ふ。無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳着いて、父経盛に身の上を告げ知らすことありと、須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。かゝりけるところに後より、熊谷次郎直実

「ヲヽイ〳〵」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。なうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せん返させ給ヘ」

と、扇を上げて指招き

「暫し〳〵」

と呼ばはったり。敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きかざし、朝日に輝くの稲妻かけ寄り、かけ寄せちゃう〳〵〳〵、蝶の羽がへし、駒の足並かっしかっし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖はひら〳〵〳〵。群れゐる千鳥村千鳥むら〳〵ぱっと、引汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も果てしあらざれば

「いそふれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば

「コハしほらし」

と熊谷も太刀投げ捨てゝ駒を寄せ、馬上ながらむずと組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鐙を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取って押へ

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名誉を顕はし給へ。又に何事にても思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

とろに申すにぞ。敦盛御声爽かに

「ヲヽやさしき志。敵ながらあっぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんことの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛の、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひ〳〵

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う〳〵」

といひ捨てゝ立別れんとするところに、後の山より武者所、の軍兵

「ヤア〳〵熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きゃつめ共に遁すな」

と声々に罵るにぞ、熊谷ははっとばかり、『いかゞはせん』とたり。敦盛卿しとやかに

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給へば、いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥陀の利剣と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の様なる御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く気後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ

「アヽ後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻ぢ向き給ふ御顔を見るに目もくれ心消え

「忰小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先駆けして薄手少々負うたる故、陣屋に残し置きたるさへ心にかかるは親子の仲。それを思へば今こゝで討ち奉らば、嘸や御父経盛卿の、歎きを思ひ過ごされて」

と、さしもに猛き武士も、そゞろ涙にくれゐたる

「アヽ愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招けとはこの事。早首討ってなき後の回向を頼む、さもなくば生害せん」

とすゝめられ

「アヽ是非なし」

とつっ立上り

「順縁逆縁倶に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。をほどいて敦盛の御死骸を押包み、取って引き結び、手綱を手繰り結ひ付ける。鞍の塩手やしをしをと。に御首携へて、右に轡の哀れげに、のうき別れ、太子を送りたる、童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに（帰りけり。）

**脇ケ浜宝引の段**

行く空の、月もさやけき夜の道、御影の里を立出でて、の景色もすみのぼる、高根に響く、の、滝の白糸、流れも。のお山をに見て、気も磯伝ひ須磨の浦、一の谷にぞ、着きにける。近き、横雲にたなびく空も青々と、枝葉しげりし松蔭にすっくり立ったる五輪の石塔。遠目にそれとが、走り寄って

「ヲヽこれぢゃ〳〵。先達て遣はされた所書に合せ、若い者等に言付けて、建ては建てたが、アちっくり笠にふりがある」

と押直してためつすがめつ

「サアお若衆様、恰好見て下さりませ。なんとよござりませうがや。これから狂ひの出ぬやうにとめを合すは」

と、懐より蓋物取出し、重ねのコウテコテ〳〵と塗るところへ、山畑かせぐ百姓ども、かたげて、ドイヤドヤ〳〵ドゞンヤドヤ〳〵

「ヲヽかいの早いの」

「ヲヽ今朝は又朝霧で夜明が分らぬわいの」

コツカコーコ

「ア鳥が鳴いた夜明ぢゃイ」

ドイヤドヤ〳〵ドヽンヤドヤ〳〵

「ヲヽ危いぞ、そこらに崖ちょがあるぞよ」

「ヲットチョヤぽいとこな」

ドイヤドヤ〳〵ドヽンヤドヤ〳〵

「ヲヽ何ぢゃ向ふに光る物が見えるなう」

「ヲヽ見える〳〵。アリャ何ぢゃあらうな」

「アリャ人魂ぢゃい」

「アイヤ〳〵赤玉ぢゃい。赤うて丸いわい」

「エヽ何いふぞい。アリヤおまへ、石屋の親仁の頭ぢゃないかい」

「ヲホンニひょこ〳〵いごくわ」

「呼んで見やんせ〳〵」

「ヲヽイ親仁どんかいの」

「ヲヽイ、石屋の親仁どんかいの」

「ヲヽイ親仁どんの石屋かいの」

「ヲヽイ、ヲヽホ石屋の親仁どんかいの」

「ヲヽイヤイ。こりや皆とうから精が出るな」

「イヤこちとらよりこなたとうから、あぢな所ヘ石塔をシャッキリコと建てさしやったなう」

「ハテあの人は商売ぢゃによつて、どこであらうが持ち運んで建てねばならぬ。ガ誂へ人が希有なやつぢゃないかいナウ親仁どん」

「アヽコレ〳〵むさと麁相いふまい。その施主人がここにござるぞ。ナア申しお若様衆。我も人も亡者のため、卒都婆一枚立てても三悪道を遁るると言ふ。まして大層なこの石塔をお建てなさるるは、御奇特なお若様衆。結構なお志でござります」

「イヤコレ親仁どん。お若衆の施主人のと人もないにソリャ何いはしゃる」

「なんとはわいらアまだ目が覚めぬな」

「アレまたどこに人がゐるぞいなう」

「ハテコレここにぢゃわい。ヲヽ〳〵ほんに見えぬわハテナ。たった今迄ここにであった。ハアどっちへござったな。お若衆様〳〵」

と呼べば、共々百姓ども

「そこか」

「ここか」

と尋ぬる所へ、娘の小雪がかちはだし息もすた〳〵走り着き

「アヽコレ〳〵父様、お若衆様にたった一言いひたい事があって来た。ちょっと逢はして下さんせいなア」

「イヤ逢はしてどころぢゃないわいの。影も形も見えぬわいの」

「ヤコレ親仁どん、お若衆がゐやらねば、忽ちこなたの損ぢゃぞや、所を知ってゐやんすか」

「但し手附でも取つて置かしゃったか」

「イヤテヤがよいから所も問わず、一銭も取らなんだ」

「ハヽアそれでよめた。石塔をかこつけに、何ぞせしめる悪工。さてはに極った。遠くはうせまいぼっかけん。サア皆来い〳〵〳〵〳〵〳〵」

と立騒げば

「アゝコレ〳〵待たしやんせ。よもやそんなさもしい心なお方ではあるまい。その証拠はわしにやるとてコレこの笛を」

「エヽ何ぢゃドヽヽヽヽアコレこの笛を貰ろたんかえ。ハハアコリヤマア袋は結構なぢゃ。さて笛はでもないが、アコレ見や節からちっくり枝葉がある。何にもせよむつかしいぢゃ」

「ヲヽむつかしい事ならお庄屋様へ往て尋ねて来い。この間大阪からやくわんといふ物持って来て見せたら、コリャぢゃといやはった。この手見るやうな物はへ引掛けるのぢゃて。又口見るやうな者は兜のぢゃて。片っぽないのは昼寝の時勝手がよいやうにしてあるのぢゃて。なんでやくわんといひますというたら、で敵の矢が当たるとくわんと鳴るて、それで矢くわんぢゃといはしゃった。ぢゃに依ってこの笛もお庄屋様ヘ往て尋ねたら知れるぢゃあらうかい」

「テさてよいわいの。石塔をした代りに置いて去んだ笛なりゃ、それが誠のあをたの笛ぢゃ。エヽこんなことならあたまで取て置いたら、まんざらの損もせまいにアヽあたたらしい目にあうた」

と、悔むにかひもあら笑止や。弥陀六がぬかれたと伝へて諸事の、手附を取るといふことはコレこの時よりと知られたり。時しも後の松原より、足早やに来る女は何者なるぞといふ内に、走り近付く藤の局

「コレ〳〵ちょっと物問はう。はどっちぢゃの。教えてたベ」

とありければ

「ヲヽ〳〵それはこれからよっぽど遠い。ガ見ればしうない女中、何故寺へ行かっしゃる」

「されば〳〵様子あっては跡より追手のかかる者。暫く影を隠さんため」

とふ中に目早くも、娘が持ったる袋を見付け

「ナウそれちょっと見せてたべ」

と手に取り給へばひなき、青葉の一管

「ヤアこれはわが子の敦盛が、肌身放さぬ秘蔵の笛。マどうしてこなたの手にある」

と、聞いて親子も不審顔。百姓どもは口々に

「ヲヽその敦盛といふ人は、この間の戦ひ源氏の侍ヲイ名は何とやらいうたの」

「ヲヽなんでも黒い縄ぢゃ」

「ムヽ黒い縄なら墨縄か」

「イヤ〳〵」

「わらび縄か」

「イヤ〳〵黒うて丸い」

「アか」

「イヤ〳〵そんな物ぢゃありゃせん。コウ真黒で耳があって足があって」

「ア鍋ぢや」

「イヤ〳〵鍋ぢゃないわい。なんでも黒うてにがい物ぢゃ」

「」

「イヤ〳〵」

「熊の」

「ヲヽ熊々、その熊の胆のと敦盛さんとナウ与次郎。こなたその時見てゐやしゃったでないかい」

「ヲヽおりゃ柴しに往て山の原で弁当喰うて見てた。熊次郎めが馬に乗って、大きな風呂敷せたらうて、黒い扇をチャイと上へ差し上げて、ヲヽイ〳〵、あつぼ〳〵というて招いたら敦盛さんが遊ぼうと聞かしゃったかして、馬のすこたんチョイとこっちゃ向けて、ヤシャンゴラ〳〵〳〵〳〵〳〵砂場へ上らしゃった。そしたら熊次郎めが脇差の長いのをずらと抜いた。敦盛さんもすっと抜いた。ヤ丁ン〳〵ヤ丁丁ンが丁ンこ〳〵してこい〳〵というて馬の上から二人ながら飛んで下りた。そしたら敦盛さんもいやになったかしてちんと坐らしゃった。熊公めがニャンマンダ〳〵〳〵〳〵といひをって、人違へしたらどもならんと思ひよったかして、コダこっちゃ向いて顔見せいとこないいひをる。こちらむけ〳〵というたら、敦盛さんがインヤそちらは無官の太夫ぢゃといはしゃった、ムヽマア〳〵ええわと弁当喰ひかけたりゃ首がころりと落ちた。おりゃ恟りして弁当踏みくだいて小便ちびったフハヽヽヽ」

「ヲヽその時いぢらしいのはアレ何とやらいふお姫様ぢゃあったなう」

「ヲヽなんでも拳の中にある名ぢゃ」

「ヲヽそんなら一拳いかうかい」

「ヲ薩摩でいこで、ヤヒイフウりう」

「ちえい」

「たま」

「ヲヽたま〳〵。そのといふも殺されてゐたげな」

と、聞いて御台は

「ヤア〳〵なに敦盛は討れしとやハア。福原の館にて、母様御無事でおさらばと、玉織諸共いさぎよう、いうたがこの世の乞ひ。長い別れになったか」

と、ありし事どもくどき立て、人目も恥ぢぬ叫び泣き、前後不覚に見えにける

「イヤコレ親仁どん。合点のいかぬ事があるわいの。死なしゃった敦盛様があの笛の主ならば、こなたに石塔誂へたお若衆と一つぢゃないかの」

「ヲヽいかにも」

「サその死んだ人が来さうなものぢゃないぞや」

「ヲいかにも」

「聞えたさっきにここ迄連立って来たのは」

「いかにも」

「掻き消すやうに見えなんだは」

「いかにも」

「どろひゅうぢゃあるまいかの」

「いかにも」

「エヽどうぢゃぞいの」

「いかにも」

「エいかにも〳〵とばかりいうて判るかい蛸はどうぢゃい」

「歯に合ぬわい」

「エヽ阿呆いはんすないの」

「ハヽヽヽさては幽霊であったよな」

と、いへば皆々興さめ顔。御台はなほしも悲しさの、思ひいやます御歎き。小雪も始終を聞くにつけ

「はかない事や」

とばかりにて共に袂をしぼりける。折ふし遥かの松蔭より、駈来る大勢、弥陀六が

「あれこそ慥かに追手の者。まづ〳〵あなたを隠すに幸ひ、この石塔の後ヘ」

と、御台の手を取り忍ばせて

「何と思やるいづれも、追手の奴等が此所を素直に通ればあなたの仕合せ。もしもなんとぞ意地張らば、これ迄平家の領地に住んだ御恩のため、なんと一働きせうぢゃないか」

「ヲヽサてんに鋤鍬の、背打くらはせぼひまくろ」

と、いふ間もあらせず、砂煙蹴立て踏立て駈来るは、が郎党、先手として、引連れドヽヽヽヽどっと押寄せ

「アコリャ〳〵〳〵〳〵〳〵コリャ百姓ども。エヽ此所へ三十余りの女の。エコウ赤金襴の鉢巻をいたし赤金襴のを着いたし赤金襴の着る物を着いたし赤金襴の帯を着いたし、赤金襴の下着を着いたし赤金襴の胴着を着いたし赤金襴の長襦袢を着いたし赤金襴の肌儒伴を着いたし、赤金襴の湯巻を着いたし赤金襴のを着いたし赤金襴の草履を着いたし赤金襴のを着いたして、此所へ着いたしたであらう。あちらへ着かこちらへ着かサ着々々々々々着ぬかせコレ着性ども」

「アハヽヽヽヽ、ハレマ仰山な着ぢゃなアハヽヽヽ」

「ヲおりゃ恟りして着が起つた」

「ヤなに馬鹿な」

「ヘイそりゃ着いたしましたことは着いたしましたけれど、おまへさんがあんまり着々々々いうてござる間に、モウ二三里も向うへ着いたしましたでござりませう。追手の衆なら一足も早うござれ」

とかすれば

「さてこそ遁すな皆来い」

と駈出すふりにて立留り、運平が耳に口

「ゴシャ〳〵〳〵〳〵〳〵」

「ポチャ〳〵〳〵〳〵〳〵」

「ナウン〳〵」

「ウン〳〵〳〵〳〵」

し合して木蔭に残し浜辺をさして駈り行く。跡打眺め

「サア楽ぢや。この間に早う」

と御台を出し

「コリャ〳〵娘。あなた一人は覚束ない。寺迄送って内へ往ね。ちゃっと〳〵」

といふところへ、思ひがけなく木蔭より、須股運平蛙の真似してポイ〳〵ポイ〳〵〳〵〳〵ポヽラノポイトコナと飛んで出ずに逼うて出で

「ヤアどこへ〳〵。かうもあろかと推量し、忠太が我を残しおかれた。御台をこっちへ渡さばよし、いやぢゃなんぞとぢくねると、大もすらり、小もすらりと抜き放し、ヤ丁ンヤ丁ンキリ〳〵〳〵ンヤ丁ン〳〵と手打切り、そっ首ころりと打落す。なんと〳〵」

とれば、百姓どもはあひる笑ひ

「イヒヽヽヽ〳〵。コラヤイ、そっ首のそっくひのと、わいらがほでの動く間に、目をすって鼻かんで爪の掃除してゐよかい」

「ヲヽさうぢゃ〳〵。なんのうっかりとしてゐようかいやい。サア、相手仕事ぢゃ手早やに来い」

と、てん手に鋤鍬大熊手、打ってかかれば、運平始め、数多の家来も一同に、抜連れ〳〵、渡り合ふ。打合ふ際に弥陀六が

「ソレ御台様逃げた〳〵。娘も逃げよ」

とあせる中、元より達者の百姓ども、腕先揃へて、『ヤア寝たや寝むたやホイ〳〵、寝た夜はようからうの、バッタバタ、バッタバタ』とかたはし家来を打殴り、運平を追取捲き、投げたり、踏んだり、蹴飛ばしたり、つめったり、かんだり、こそぐったり、かいたり、なめったり、ひねったり、ついたり、ゆさくったり、引っぱったり、寄ってかかって打叩く。急所にや当りけん、『うん』ともなんともいはずに白眼をぐっとむいて死してんけり

「ソリャ死んだわ」

と逃行く家来。又追っかくるを、弥陀六が

「コレ〳〵待つた」

と呼返し

「エヽ御台の難儀を救ふためぼっ散らすばかりでよいに。アヽ死んだりゃ尻がむつかしい。サア皆ござれ」

といふところへ、駈って来る庄屋の孫作。死骸を見付けて

「サテこそこそサテ。アコリャ〳〵、びしゃ、、歯ぬけ、、、わん、いぼ、そんなら。一人も散らすことならぬぞよ。コレ皆よう聞かあれ。今梶原様の郎党番場忠太といふお侍様がござつて、百姓どもが狼藉し家来運平を殺したる由憎い奴。残らず引立て来るべしと厳しい言付け、ア、ひょんなことしておららに迄厄介かける。遅なったらなほ怖い。サア〳〵おぢゃ〳〵」

といふに皆々尻込みの、中に弥陀六進み寄り

「イヤ申しお庄屋様。殺したと聞かしゃったは大きな間違ひ。アリヤ目がうて死んだのぢゃ。その証拠には死骸に一つも疵がない」

「ムヽそれがならおららも嬉しい。ガ一遍を改めて見やうかい。ヲドレ〳〵」

と眼鏡取出し、しっかと掛け

「ハテ怪しやいぶかしやなア。今この目鏡を掛けるや否、四方八方真暗闇となったるは、正しくこれは変化の所為か。なににもせよ稀代の不思議をサマ見ることぢゃよな」

「ワイ庄屋どん暗い筈ぢや。目鏡鞘口ぢゃがなアハヽヽヽヽ」

「ワイコリャえらい麁相した。わいらがあまりあはてるさかいぢゃ」

「エゝ何をいうてんね。おまへがあはててゐるんぢゃがな」

「ムヽマヽヽヽヽよいわい何分裸にせにゃ分らぬわい」

「ヲヽさうぢゃ〳〵」

「ホヽヲ屈強な男ぢゃの、ホンニどっこも疵はないわい。ヨウ〳〵〳〵首がないわい首が」

「アハヽヽヽヽ庄屋どん。ソリャおまへ逆様ぢゃがな」

「ムヽ逆様かヲヽホンニここが頭ぢゃ。ア目鼻口えらい髭男ぢゃ。腹、、ヲヽ待てよ。ヤこいつ受臍ぢゃ。親に孝行であったか、マヽヽヽ片身はよいわひっくり返して見い。ムヽ首筋ちり毛、アゆがんであるは小い時無理いうて据ゑられたんぢゃなアハヽヽヽヽ。ヨウ〳〵ヨウ〳〵えらいところに鉄砲疵」

「ワイ庄屋どん。ソリヤおまへ尻の穴ぢゃわいの」

「ヲヽコリャけつ穴か、太いけつ穴ぢゃな。犬にしたら強からう」

「庄屋どんそんな所改めいでもよいぢゃないかいの」

「インヤ〳〵これが大事の尻仕舞ひぢゃぞ」

「その杖でせせってみい」

「ワアハヽヽヽヽ煙が出た」

「エヽ、庄屋どん、そりや屁じゃがな、きたないがな〳〵〳〵〳〵」

「アヽコリャ〳〵屁は何も汚いものじゃない」

小高き石に腰打ちかけ扇手にふれ大音声

「エヽながら、屁と申せども文字に書けばと云う字、根をただせば菩薩のアクビ、げに誠神にあり、まった今目前へい国元年へのへへの年、プンプの大将九郎へい官義経公、クサシ坊ヘンケイと、へよどりにて平をへめる。平家の大将へよ盛はへの病ひ、すかべのはサツマイモをむし取り土佐坊は尻馬よりすべり落ち、ヘン太は佐々木と宇治川の先陣を争い、又文七、の平兵衛は男立にてへんくわを好み、古きへたはへたなりにかたまり、蛇の道はヘビが教へ、へは身を助ける、不仕合せな運平が最後屁は、是即ちケツ定往生、人は屁さへこけば、尻のほこりがとれてすっぱりアナカシコ〳〵」

「お庄屋どん、引導ごくろう〳〵」

「ムヽアア〳〵疵がなうて目出たい〳〵。なんにも怖いことはありゃせんわ。この中でよう物いふ者がたった一人往て、さっぱりと言訳しいさへすりゃ済むことぢゃ」

「ヲヽほんにさうぢゃの。誰がよからうの。」

「ムヽ待て〳〵。イヤコレ年の功ぢゃ弥陀六こなたいかあれ」

「イヤ行く分は構はぬが南無阿弥陀仏。おりゃ口癖の南無阿弥陀仏。念仏が邪魔になって南無阿弥陀仏、どうもならぬで南無阿弥陀仏〳〵〳〵」

「アえらい難儀ぢゃの。そんなら雀の忠吉やらうかい」

「イヤモわしゃあんまり口早やで、茶々苦茶〳〵いふことが皆無茶苦茶になってどうもならん。こればかりは堪忍しとうくれ〳〵〳〵チュ〳〵〳〵〳〵ブルー」

「エヽしいわい。さては咽の丹兵衛かい」

「イヤわしゃもうこの通り咽がゴロ〳〵いうてどうもなりませんぢゃヲホヽヽヽ」

「ヲヽそんなら歯抜の与次郎やらうかい」

「ムヽヽおれがやうな歯抜が往てオネ〳〵いうたとてなんにも分りゃせんわい」

「ムヽ、そんなら吃又やろかい」

「イヤモわしゃ吃りますわい。この儀はお断り申します」

「さてはびしゃのぐ太右衛門かい」

「庄屋どん。おりゃ若い時ひえを患うて、声が鼻へ抜けて物いうても先へ通じませんぢゃ。こればかりは御免蒙りたいといふもんぢゃ」

「ハテさてそのやうに譲合うてては埒が明かんぢゃないかい。ヲヽ幸ひここに石を運んだ縄がある。いや応いはさぬ取り勝負。この庄屋がしてくれる」

と、手早やに縄切り、後で、モッチャラクッチャラ引結び

「サア〳〵〳〵結んだを取った者が行くのぢゃぞ。サアサア〳〵鬮引ぢゃ皆つかまヘ〳〵。ハア頭数よんでしたがコリヤ一筋余ったわ」

「ハテそりゃ親の縄ぢゃ。あまりもんに福がある。庄屋どんとらしゃれ」

「ヲヽほんにさうぢゃそんならおれが取ろ。サア〳〵皆引いてくれ〳〵〳〵」

「サアえゝか引け〳〵〳〵〳〵

「ヤ一イニフ三ツでよい〳〵よいやナ」

「すっとせい」

「ハア悲しや結んだのはおららに当った」

「アヽサア〳〵サア庄屋どん往かあれ〳〵」

「イヤ待てよおりゃなんにもいかう筈がない」

「デモ鬮に当ってあるがな」

「エヽそんなら今一遍仕直しぢゃ」

「エヽそんな穢いこといはんすないの。おまへが言出したんぢゃがな。おいらのやうな百姓になって往て、言訳して下さんせ」

「サヽヽヽヽお頼み申します〳〵〳〵お頼み申しまっせ」

と引立てられ

「我は幸ひ百姓どもの、畑姿をわが姿」

と、鍬打担げ立上りしが、かねて弱気のお庄屋が歎き

「アヽヽヽヽこれ申し、お気の毒な」

とばかりにてなんのくもなく行く親仁。言訳心ぞいぢらしき。皆々遁れこそ〳〵と逃げ行く足もちょこ〳〵走り、鬮に当りて一人行く心の、中こそ、をかしけれ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。